

## テーマ設定をめぐる

宮城公子

近世中・後期、都市の民衆生活の活性化、民俗的世界の周縁の拡大、一揆・うちこわしの激化、そして民衆宗教の創唱など民衆史は新たな段階に入る。民俗学・民衆思想史・社会史の研究はこうした民衆の姿を歴史的リアリティにおいてとらえその成果は多彩な形でしめされている。かつて近世思想史研究はこうした民衆の姿を思想家の民衆観としてとらえるに過ぎなかった。それに対し今回の三報告は民衆史の新たな段階において民衆の動向が思想形成の一つのモチーフになったとする立場に立つ。つまり、民衆のどのような動向が彼らの思想形成にどういった方向性をあたえたかを問う視覚からなされている。しかもこれら三つの報告のとりあげる思想は儒学・国学という立場の相違はあれそれぞれの立場から民衆教化を意図したのであり、その事によって現実社会にアクチュアルに働きかけた。だから、これらの思想は思想家の思想として言説空間に投げ出されたものでなく、民衆教化の思想として機能したのであり民衆思想の動向にある刻印をあたえる事となった。こうした視覚からする三報告は民衆思想史の研究にもある波紋を投げかけていると思われる。しかも三報告はその取り上げる時期は十八世紀初頭より、幕

末維新期をはさみ日本近代を見通すものとなっており、日本の近代化の過程で知識人と民衆の姿を問うものともなっている。

宮川報告は、懷徳堂の諸思想をとりあげるが、その核心は朱子学の理を「いまここあたり前の道理」、つまり普遍的な人間の規範の根拠とするものであって、この点より徂徠や仁斎の古学は論争的言辞にすぎないという。その民衆教化は同時期の都市民衆をとらえた石門心学を見据え、それに対抗して行なわれたものであり、石門心学は、心学講話による心の悟りに終始するが故に斥られるべきであり孝子の表彰などの教育制度をとまなう社会改善に向かわねばならないとした。こうした民衆教化の思想は辻本報告で具体化される。懷徳堂の人々は「わが党」と自称したように一つの思想運動であり自律した知識人であろうとした。だがその自律性のありかたをめぐり、中井竹山は権力に近づき学問所を公的なものとしようとし、中井履軒・富永仲基は現世から孤立しようとした。こうした懷徳堂の知識人のありかたはこの時期の、儒者と幕藩制のかかわりに問題を投げかけている。

辻本報告は江戸初期より後期水戸学までを見通した大きな構想の

もとになされているが中核は十八世紀後半、とりわけ寛政期以降の民衆教化の思想にある。つまり儒者の目からみれば「淫祀邪教」の横行とみえる民俗的世界の活性化の段階にあつては、徂徠学のような愚民観にもとづく政治的術策による共同体を通じての民衆教化は無効だった。替わつて、人の心から社会、世界そして天地自然というコスモロジカルな全体を統一した秩序原理でとらえる朱子学がこうした要請にこたえるものとして登場する。その際「一国領内は一つ之学館之内」という姿をめざし寺子屋等での民衆教化と密接なかわりにおいて学校における武士教育が重視されるが、異学の禁は、民衆史からみればこうした文脈においてとらえられる。幕末維新期、後期水戸学は「内憂外患」という新たな危機に対し、教育による教化でなく、宗教による民心収攬を構想した。それは民衆宗教の一つのモチーフであった「死後安心」について儒教の一気的生命論による父子一体論をとなえ、忠孝の道徳論とあいまつて「皇統無窮の国体」の理論的根拠となつたとする。

桂島報告は従来それぞれ、個別にとりあげられてきた幕末国学と民衆宗教の統一的把握をめざしたものである。両者は民俗的信仰と交錯して展開していること、記紀の神々とかかわっていること、その担い手が農村運動とかかわっていること等の共通点をもつが、それ故にこそ拮抗する関係にあつた。つまり幕末国学はアマテラスを太陽神Ⅱ皇祖神Ⅱ伊勢内宮の神ととらえる。一方「死後安心」について幽冥神への探求の衝動が強くそれを基軸にアマテラスより上位に宇宙創造神を想定した神々の秩序化が行なわれる。そしてこうした壮大なコスモロジーの構想は民俗的信仰との競合においてはじめ

て可能だった。だが一方そのなかには、大国隆正のように記紀の神々の秩序から民俗的信仰を排除し統御しようとするながらも存在しこれらは後期水戸学とともに国家神道の一端を担うこととなる。民衆宗教は民俗的信仰を基盤として形成されるが、その中に太陽神Ⅱ伊勢の神としてのアマテラスへの信仰を含んでいた。だがそれは皇祖神でなく、その意味で民衆の独自の救済思想だった。日本近代においては民衆宗教は教派神道として「神道化」されて発展する。この「神道化」の過程は民衆宗教はもとより、それを担つた幕末国学からも幾多の可能性を奪うものであつた。その過程の問題性を凝視するのが桂島報告の意図するところである。

近世後期思想史における民衆というテーマにもとづく三報告はこのような日本近代そのものへの問いを投げかけるものでもある。

(甲南大学教授)